©Hisao Suzuki
第151回 大原美術館 ギャラリーコンサート
郷古 廉
Sunao Goko
ベートーヴェン
ヴァイオリン・ソナタ
全曲演奏会 Vol. 2
BEETHOVEN : Sonatas For Violin and Piano Vol.2
ピアノ／加藤洋之
Hiroshi Kato
2018年4月7日(土) 開場18:00 / 開演18:30
大原美術館・本館2階ギャラリー
全自由席 4,000円(税込)
学生シート 1,000円(税込)
※小学生～大学生対象・限定先着30席
チケット発売3月13日(火) 9時～
お申込み・お問合せ
大原美術館
086-422-0005
＊月曜休館
くらしきコンサート
086-422-2140
＊土・日・祝日休業

第151回 大原美術館 ギャラリーコンサート

郷古 廉

ベートーヴェン ヴァイオリン・ソナタ 全曲演奏会 Vol. 2

大原美術館では昨春、ウィーンを拠点に活躍する若手ヴァイオリニスト**郷古 廉**（ごうこ・すなお）さんが挑む「ベートーヴェン ヴァイオリン・ソナタ全曲演奏会」（全３回シリーズ）、第１回公演を開催いたしました。ベートーヴェン青年時代の作品を瑞々しい感性で表現し、大きな反響をいただいた前回に続き、今年・来年と３年にわたって、深化を続ける郷古さんのベートーヴェン演奏を、春のギャラリーコンサートでお届けしてまいります。

今回のプログラムは、ソナタ第４番、第６番、第７番、第８番。特に６～８番の３曲（作品 30）は、ロシア皇帝アレキサンダー１世に捧げられたことから「アレキサンダー・ソナタ」とも呼ばれ、ベートーヴェンが難聴の苦しみと絶望を吐露した未投函の手紙、いわゆる“ハイリゲンシュタットの遺書”が書かれる少し前の作品といわれています。芸術家としての自負を強く意識した最初の音楽家とされるベートーヴェンは、耳の持病がいっそう悪化していく中で精神的危機と対峙し、苦悩の手紙をしたためたのちに、芸術という希望の光を再び手にして創作に向かいました。そして、やがて交響曲第３番をはじめとする中期の傑作を次々と発表していくことになるのです。

ひたむきに音楽を追い求めた天才の情熱に思いを馳せながら、名画が並ぶ会場で、春の宵のひとときをお楽しみ下さい。共演は、前回も素晴らしいピアノで会場を沸かせたアンサンブルの名手、**加藤洋之**（かとう・ひろし）さんです。

ヴァイオリン・ソナタ　第４番　イ短調　Op.23
ヴァイオリン・ソナタ　第６番　イ長調　Op.30-1

＊＊＊

ヴァイオリン・ソナタ　第７番　ハ短調　Op.30-2
ヴァイオリン・ソナタ　第８番　ト長調　Op.30-3

≪ハイリゲンシュタットの遺書≫ 古くから温泉など保養地として知られたウィーン郊外の街ハイリゲンシュタット。ウィーンで成功をおさめつつあったベートーヴェンは、数年前から悩まされていた難聴の治療のため、医師の勧めでこの街に滞在していました。しかし、もはや症状が悪くなるばかりで回復が見込めないことに絶望し、弟たちへの手紙に、自殺まで考えたという深刻な告白をつづります。当時ベートーヴェンは31歳。ほとんど耳は聞こえなくなっていました。手紙は発送されることなく、ベートーヴェンが56歳で亡くなったあと自室の戸棚から発見され、後世に“ハイリゲンシュタットの遺書”の名で知られるようになります。
手紙には「死から私を引き止めたのは芸術だった」、「自分が果たすべきだと感じているすべてを成し遂げないうちは、この世を去ることはできない」と記されていました。音を失ったベートーヴェンの人生から、その後も偉大な音楽が誕生したことは、彼にとってまさしく芸術の勝利であったにちがいありません。今回演奏されるソナタの作曲時期には、そうした苦難の只中にあったベートーヴェンの葛藤の日々が重なっています。

郷古 廉（ヴァイオリン）Sunao Goko, violin

1993年、宮城県生まれ。2006年第11回ユーディ・メニューイン青少年国際ヴァイオリンコンクールジュニア部門第１位（史上最年少優勝）。2007年 12月のデビュー以来、新日本フィル、読売日響、東響、東京フィル、日本フィル、大阪フィル、名古屋フィル、仙台フィル、札響、アンサンブル金沢ほか各地オーケストラと共演。指揮者ではゲルハルト・ボッセ、秋山和慶、井上道義、尾高忠明、小泉和裕、上岡敏之、下野竜也、山田和樹、川瀬賢太郎各氏などと共演している。国内各所でリサイタルをおこなうとともに、2011年、2012年、2014年と≪サイトウ・キネン・フェスティバル松本≫でストラヴィンスキー作曲「兵士の物語」に出演。≪東京・春・音楽祭≫、≪ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン≫にも招かれている。
現在、ウィーン私立音楽大学で研鑽を積みながら、ドイツ、フランス、スペイン、スイス、イタリア、チェコなどでも演奏活動を展開している。
これまでに勅使河原真実、ゲルハルト・ボッセ、辰巳明子、パヴェル・ヴェルニコフの各氏に師事。
2014年にEXTONレーベルより無伴奏作品でCDデビュー。2015年にはnasscorレーベルよりブラームスのヴァイオリン・ソナタ集を、2016年11月には EXTONレーベル第２弾となるバッハとバルトークの作品集をリリースした。2013年ティボール・ヴァルガシオン国際ヴァイオリン・コンクール優勝ならびに聴衆賞・現代曲賞を受賞。
使用楽器は、1682年製アントニオ・ストラディヴァリ（Banat）。個人所有者の厚意により貸与されている。

加藤 洋之（ピアノ）Hiroshi Kato, piano

東京藝術大学附属音楽高校を経て同大学を首席で卒業。大学院在学中の1990年にジュネーヴ国際音楽コンクール第３位に入賞し、ハンガリー国立リスト音楽院に留学、その後ドイツ・ケルンでも研鑽を積む。これまでハンガリー国立響、ブダペスト・フィル、ブルガリア国立放送響、ヘルシンボリ響、東京都響、日本フィルなど内外のオーケストラとの共演、ウィーン芸術週間、プラハの春、ルセ国際音楽祭、リムーザン室内楽フェスティヴァルなどの音楽祭や、ウィーン楽友協会、ウィグモア・ホールをはじめヨーロッパの主要ホールへの出演など各地で演奏活動を続けている。ウィーン・フィルのメンバーたちとは頻繁に室内楽を演奏し、特にライナー・キュッヒル氏（元第１コンサートマスター）のデュオ・パートナーとして、1999年から現在まで国内外で共演を重ねている。